

異文化間コミュニケーションにおける言語能力

—文化人類学の方法論から見出せる可能性—

ペーター・アッカーマン

問題提起

この発表の前半では、異文化間コミュニケーション能力の発揮に関して、ヨーロッパで行われている目下の代表的な議論を紹介する。そのなかで、特に「知識」と「能力」、すなわち「知っている」と「できる」こと (knowing that と knowing how) の区別について考えていきたいと思う。この区別は、外国語教育において、学習者自身の学習アプローチを再認識させるという意味で重要なものといえる。

異文化間のコミュニケーションといえば、すぐに思い浮かべるものの一つが言語習得だが、われわれの周りには、すでに言語習得のための多くの教科書、文法表、語彙リストや練習資料などがある。しかし、言語能力は教科書のみで身に付けるものではなく、学習者自身の心理的・感情的状態も大きく影響している。ところが、この「知識」以外の部分は教師が直接指導できるものではない。

発表の後半では、学習者のコミュニケーション能力を發揮させるにあたって、直面する現実的課題や思考的問題に注目する。なぜなら、学習者が置かれた具体的な社会や状況に対して、明確な方法論に基づいた体系的なアプローチを行うことのみが、コミュニケーション能力の發揮につながるといえるからである。そして、直面した状況に対して把握・分析をするという態度は、文化人類学や民族学のような調査方法に似ており、コミュニケーション能力の向上のためには、これらの調査方法から学ぶところが多いと考えている。

私はヨーロッパで生活しておりますので、異文化間コミュニケーションをヨーロッパの観点から考えております。周知のように近年の EU (欧州連合) は拡大傾向にある。構造的にはそれぞれの加盟国が独立したままで、欧州という大きな空間を作ろうとしているわけだが、そんな中、各国の個別のアイデンティティを乗り越え、ヨーロッパ人としてのアイデンティティはどうあるべきかという課題が浮上してくる。これが目下激しく論じられているテーマである。その中でもますます注目されているのが、やはり、言語能力の發揮という点なのである。

ヨーロッパでは、二ヶ国語を流暢に駆使できる人は少なくない。それにもかかわらず、無数の問題に直面しているのが現状である。つまり、スムーズな情報伝達以上に、感情のレベルで A 言語圏と B 言語圏の間の信頼関係を深めていくことが必要とされているということである。たとえば、非常に期待されてきたヨー

ヨーロッパ諸国同士の交換留学生制度などが言語能力をどれほど高めるのに成功しているのかが実に不明確である。つまり単純に言葉ができるということ以上に、言語能力が発揮されるか否かが課題なのである。

言語能力とはなにかーヨーロッパにおける新しいアプローチ

かつて、特定の国の言語ができれば、そこで生活している国民とコミュニケーションができ、その文化も理解できると考えられていた。国家や国語という理念は18世紀にできたもので、19世紀に、主に学校教育や当時の教養主義によって国民のアイデンティティづくりには大きな役割を果たしてきたことは否めない。しかし、現代社会の複雑な仕組みや多様性、そして人間の移動やそれに伴うアイデンティティの葛藤によって、国語に関してさまざまな議論が尽くされるようになった。そして特定の言語ができるからといって、必ずしもその言語を使用する人々の慣習や文化が直ちに理解できるとは限らない、ということが認識されるようになってきた。

すなわち、言語とは相手とのコミュニケーションや理解のための手段というより、相手との接点を探し出す手段であると考えなければならない。これが言語の本質的な機能の一つで、いわゆる negotiation (交渉) の手段である。言語について、近年このように考える学者の数は増えつつある。これはヨーロッパの現状を反映したもので、「多数の伝統や価値、異質の議論によるネットワーク」がすなわち「国」であるという理解をする立場から生まれてきたものだといえる。

ヨーロッパで言語能力について研究している学者のなかで、Michael Byram がよく知られている。Byram 氏はヨーロッパの一つの伝統である人格・教養教育の思想をとりあげ、その中に教師による指南の可能・不可能の区別があることを明確にし、学習者自身の態度と意欲の役割に注意を向けている。また2008年に発行された論文集「Communicating Across Borders—Developing Intercultural Competence」の中でも言語能力をなすものには、知識、スキル、行動、感情、態度など、さまざまな要素があると指摘している。

そんな Byram 氏は欧州評議会言語政策部門 (Council of Europe, Language Policy Division) の白書に対して刺激的な提案を著した研究グループの一人でもあるが、提案のタイトルは Autobiography of Intercultural Encounters という。直訳すれば「異文化間の出会いの自叙伝」となる。意識すれば、「異文化間の出会いに際して自分の観察・行動・反応・感情・推量などを把握する訓練方法」というような題名である。

この提案で Byram 氏が強調している点の一つは、「知識」というものは言語能力をなす一要素に過ぎず、知識以外に「体」全体が大切な役割をはたしているということである。具体的にいえば体験などを通じて、ものを発見・解釈・評価するといったスキルであるが、加えて教養と態度も決定的な役割を果たしているという。言い換えれば、言語能力というものは、「知っていること」と「出来ること」、あるいは cognitive (認識) と affective (感情) のレベルの相互作用による

ものだということである。

もちろん、言語学習の際に「知識」の比重は決して小さいとはいえない。語彙、文型、文法などの知識は勉強の基盤をなすからである。加えて欠かすことができないのが「文化」についての知識であろう (knowing about the culture)。そもそも文化と言語、文化教育と言語教育をどう結びつけるべきか、という議論は周知のようにおよそ30年続いている。また、最近の議論の中で両者の関連性の高さについてもよく論じられている。だが「文化」という概念の使用はかなりいい加減である場合が多い。

それに対して、提案書「異文化間の出会いの自叙伝」では、「特定のグループが、そのグループのアイデンティティーを確定するために過去から大切とみなして伝承してきたもの」が「文化」であるとの考え方を示している。この定義からいえば、歌舞伎やお茶といった伝統文化は「日本」のアイデンティティーの確定に一役かっているということになるが、提案書では、同じ世代の若者にしか通じないブログやゲームの決まりも、グループのアイデンティティーを徐々に形成してきた上で、これも「文化」と名づけることができると述べている。

つまり文化とは「歴史」と結びついた概念であり、特定のグループの内部で共通の思想、行動パターンや価値観が固定化し、短期間にせよ長期間にせよ、それらが維持される間そのグループのアイデンティティーをなすものとして考えられている。

文化の定義に関して、特に文化と歴史(過去)の関連性について、刺激的な考えを展開しているのが教育学者の Wolfgang Sünkel である。文化とは「生まれつきの遺伝情報とは無関係に、社会化と教育による個々人の知識と知恵とその応用と伝承」(Sünkel 1997) であるとしており、人間が意識的にも無意識的にも社会化と教育によって「人間」になると強調する。このようにして Sünkel がスキル・知識・価値観の伝承や教育と「文化」との相互関係に注意を喚起しているわけである。

さらに言語能力の議論においてこの定義の大切なポイントは、「文化」というものは、「日本文化」「ドイツ文化」などのような固定したものではなく、「学ぶ」ことによって過去から将来に向かって常に変化しているものだということである。言い換えれば、「文化」は特定の社会の中での永久的な学習プロセスであり、「文化」を固定したものと考えてしまうと言語能力(相手に接する能力)が上がらない、ということがいえる。

他文化の理解は、相手の学習プロセスを自分の学習プロセスによって理解するということを意味しているといえる。そこで「知識」の領域に属するものを教師の指導によって徐々に把握できる。しかし、それだけでは不十分で、学習者には多くの体験が必要で、それを通じて自身の中で生じた感情的反応の整理、さらに能力獲得プロセスにおける評価といったものがある。ところが、これらは基本的には学習者自身の行動や意識による部分が大きく、教師は体験を奨励するなど、あくまでも間接的の手助けしかできない。

その手助けの一つに、学習者に自分の発達と成長を認識させるガイダンスがあ

る。前述した「異文化間の出会いの自叙伝」という提案書はそのようなガイダンスの手引きとして編集されたものであり、それによって学習者自身が自分の考えや感情を体系的に整っている形で認識を深めることができる。

「異文化間の出会いの自叙伝」では次のような順序でテーマごとに自分の考え、観察、経験、感情などについて記録するように勧めている。

1. 自分について
2. 出会いの場面について
3. 出会った人（人々）について
4. 自分の気持ちについて
5. 出会った人の気持ち（推測）について
6. 自分の行動や気持ちと相手の行動や気持ちとの相違点について
7. 自分のコミュニケーションを、相手と場面に合わせて、どのくらい変えたかについて
8. 出会いの場面でよく理解できなかったこと、問題点をどう解決しようとしたかについて
9. 経験したことを、別の文化での経験と比較して何が理解したかについて
10. 振り返ってみると、その出会いは自分にとってなにを意味しているかについて

興味深いのは、言語能力の発揮に関して「異文化間の出会いの自叙伝」などで見られるアプローチは正に文化人類学的手法を取り入れたものだという点である（文化圏によってその方法はむしろ民族学あるいは定性社会学のものとしてされている）。

言語習得は文化人類学者などの定性分析法によるデータ収集活動に類似している。というのも、必要なデータを自分の力で集め、それからそのデータを多数の観点から分析して体系的に整理することによって徐々に理解が進むというアプローチを行うからである。

ところが、言語能力において、知識と高度の認識レベル以外にもう一つの重要な要素がある。それは言語の自然の流れである。そのため、言語能力の研究者が言語の応用—リアルタイム応用—の重要性を強調し、必ず専門教育（あるいは実技）と教養教育を結合させるよう呼びかけている。その点について Byram 氏に問い合わせたところ、次の二点を指摘してくださった。

- 言語を教える際、知識（knowing that「知っている」こと）を教育目標とすることが可能であるのに対して、「できること」（knowing how）を教育目標とすることは困難である。
- 結局言語そのものを教えるというより、言語を使って何か別のことを教えなければならぬ。つまり、学習者の注意をなるべく課題達成に向けることが大事である。

以上のように Byram 氏が言語の自然の流れの件について考えている。ただ、気になるのは、ヨーロッパの異文化間言語能力の研究や議論を考慮すると、言語

の音声学的な特徴、スピード、リズム、抑揚などやそれによる「雰囲気づくり」の能力については、ほとんど触れていないということである。単語や文法が多少間違っている、雰囲気が合うためコミュニケーションが成功する場合もある、という事実について述べていないことは少々不思議に思う。

そもそも、この「雰囲気づくり」プロセスについて理解を深めるために、言語と身体の関係性を注目する研究が大いに参考になる。たとえばアメリカの哲学者・臨床心理学者、Eugene Gendlin が発表した「思考と言葉における身体的作用」などは、特に刺激的なものである。

「異文化間の出会いの自叙伝」の話に戻る。この提案書は理論編と複数の応用編からなる。理論編は、ヨーロッパの伝統的教養思想の色が濃く、現時点ではただの提案にすぎないが、今後の議論に影響を与えていくに違いない。理論編の前半は文化論で、現在ヨーロッパが直面している問題を背景に再認識すべき点を列挙している。詳細に論じられているテーマのなか次のようなものがある。

- 多数の文化からなる社会、移住、共通の歴史や神話などを有する nation の理念
- アイデンティティー、自分史・life history
- 自分が受けた教育に基づくイメージや偏見
- 自分の態度に影響を与えた要因（ステータス・学校・家族・マスメディアなど）
- 価値観・宗教などの選択と拒絶のメカニズム
- 言語スタイルや表現法の役割
- 二つ以上の文化において自然にコミュニケーションできる code switching のスキル
- そして最後に、社会の多様性を越えた、言語能力による積極的な社会参加の可能性

「異文化間の出会いの自叙伝」の後半は、越えるべきさまざまな「壁」に焦点を当て、共有のアイデンティティーをよりどころとするグループ、超自然の世界に関する思想体系を持つグループ（「宗教に基づく集団」の言い方は避けている）、言語やコミュニケーション・パターンからなるグループ、地域や国籍と無関係のグループの間の境界線を論じている。ただ世代群によるグループの出会いについては触れていないことは気になることであり、指摘しておきたいと思う。

問題点

1. 国際社会の現状

Byram らによる提案「異文化間の出会いの自叙伝」は言語学習において再認識すべき点を描いていることにその特徴がある。言語能力は、学習者の知識だけにはならず、態度、スキル、感情や行動を含めるものであり、コミュニケーションを遂行しているうちにその接触場面の様子を体系的に整理しながら徐々に伸び

ていくものであるとっている。

この提案を意識しながらいくつかの具体的な問題点についても目を向けていきたいと思う。まずは「中途半端の言語能力」に焦点を当てたい。日本の研究者、清水睦美（しみず むつみ）と児島明（こじま あきら）は、彼らが著した「外国人生徒のためのカリキュラム—学校文化の変革の可能性を探る」（2006年）において、外国人生徒の背景には、父と母の言語が異なっている、本人が複数の言語圏で教育を受けている、あるいは両親が同じ言語を使っている、父と母の背景が違っているために言語と感情の結びつき方に問題があるなど、複雑なケースを挙げている。清水らが示しているように、これらのケースにおいて言語能力の発達は困難で、いわゆるセミリンガルになる場合が多い（セミリンガルは、会話的能力はあっても学力に結びついた言語能力はないことを意味している）。また、職場や学校などで言葉遣いが不自然なため、いじめられたり締め出されたりすることもある。こういった問題を見ると、改めて現代社会の多様化が進んできていることがわかるが、これに対して、理想的な言語能力ではなく、現実を見つめて期待できる言語能力を考慮しなければならない。

ほかにも現実に対応しうる言語能力の向上を阻止する問題点がいくつか挙げられる。文化社会史の研究者 Joachim Matthes をはじめ、指摘しているのはヨーロッパで成立した従来の国民国家という枠組みである。どういうことかというのと、「国民国家」という理念のもとでは、一つの「国」は、国民の連帯意識を強めるために、その均質性を教育の目標にしなければならない。したがって、国史と国語が国民形成の要になり、近代ヨーロッパにおいて言語を「自国の言語」と「他国の言語」にはっきりと区別するようになった。この「自」と「他」の区別は外国語を「他」の国の言葉、ひいては「他」の国のアイデンティティーと決めつけてしまうので、外国語における能力の発育を大いに阻止してきたといえる。グローバリゼーションの進展などが見られる現代において、この点については国民国家の枠組みの再認識が必要であろう。

もう一つの問題点は、現在われわれが直面している学力低下（特に国語能力低下）である。この危機感によって、国語力を重視する考え方に注目が集まるが、逆に外国語を軽視する危険性が出てきており、地元の人々の外国語における言語能力が衰えていく可能性がある。一方、地域の中に移住者が来た時、地元の人々が移住者に対して一層厳しい態度をとり、自分が外国語を学ぶというより移住者に地元の言語を学んでもらうべきだと考える人が少なくないが、地元の人から浴びせられる厳しい要求に応えた移住者の言語能力のほうが、高いレベルに達するという皮肉な結果も起こりかねない。

この問題を突き詰めて考えていくと、monocultural と multicultural（ひとつだけの文化的背景と、二つ以上の文化的背景を持つもの）の意思疎通がいかに困難であるということを再認識する必要がある。特に後者が得意としている code switching、すなわち2つ以上の言語を切り替えて使用する能力を再評価する必要もある。しかし、monocultural の人が果たして code switching 能力を適切に評価できるのかという疑問が残る。

2. 多言語国家スイスにおける現状

周知のように、スイスはヨーロッパのなかで非常に珍しく、すでに19世紀から（事実上は1798年から、憲法上は1848年から）多言語国家となっている。ドイツ語を公用語とする市町村は圧倒的に多いが、20パーセントはフランス語、7パーセントはイタリア語、1パーセントはRaeto-Romanisch語を公用語としている（公用語は市町村によって決められており、学校教育は原則としてその公用語で行われている）。このような環境におかれて国民の母語以外の言語能力は極めて高いはずである。もちろん、言語と言語の境界線の近くに生活する人はたいてい二つの言葉を流暢に使うこともでき、あるいは結婚や仕事などの関係で複数の言語を使いこなせる人も少なくない。しかし、スイス国内の言語区域同士のコミュニケーションは決して理想的ではない。

では、母語以外における言語能力を妨げるのはなんだろうか。まず、第一に挙げられるのは、メディアである。現代社会において、個々人の「世界」は自分の家族や近所付き合いというより、メディアによって形成されるといえる。新聞、雑誌、テレビ、インターネットなどによる、スピーディーな情報交換、スピーディーな情報キャッチは現在の特徴である。そのため、人々が選択するのは自分の母語や母語に翻訳されたメディアである。また、実際の人々の交流の様子を見ても同様で、それぞれの言語圏のスイス人の大部分は自分の言語圏の中でしか動いていないことは現実である。同言語を使う人同士のコミュニケーションが一番楽だからである。この状況のもとでスイスのそれぞれの言語圏は自分独自の政治的考えを持ち、それが国内の政治的・思想的対立の一つの重要な原因になっていることは否めない。

スイスのドイツ語圏が直面している状況を鑑みると、言語能力にまつわる一般の問題点を明確にできると思う。前述したように言語というものは文化、つまり特定のグループの過去と歴史による共通性とアイデンティティーを反映しているといえよう。しかし、スイスは「国家」というより「同盟」であり、正式な国名はスイス誓約者同盟である。したがって地域や市町村ごとの独立性が強く、そこで生まれ育つ子供たちは、まずマスターしなければいけないのが話し言葉である地元の方言とコミュニケーション・スタイルなのである。

世界に目を転じると、標準語に相当する「正しい」読み書きの言葉が崩れ、話し言葉優先という傾向がみられる。それに伴い、同じ話し言葉によるグループがいくつもできあがり、社会の断片化（fragmentation）ということがおこりやすい。こういった現象はスイスの言語の断片化と比較して共通点がたくさんあると思われる。

スイス・ドイツ語圏の書き言葉はドイツ語ではあるが、地域・市町村の言語的アイデンティティーを守るために標準ドイツ語を話し言葉として一切使用しない。外国の話し言葉であるドイツ標準語に抵抗しているわけだが、一方で国際化が進んでいる中、特定の言語に対する固執あるいは抵抗は心理的に負担になっているということがおこっている。

またフランス語圏とドイツ語圏のあいだには、隔たりと不理解をもたらしてい

ることもある。フランス語圏の国民は日常的にフランス語標準語しか使用しない。その一方で、書き言葉であるドイツ標準語を学習しなければならないという状況がある。その結果、フランス語圏の人々は話し言葉と書き言葉が異なっているドイツ語圏の存在を不愉快に感じ、ドイツ語における言語能力も全く上がらないという事実がある。

つまり、スイスは多言語国家であるからこそ、言語能力と町・州・地域・市町村のアイデンティティーの相互関係が明瞭に現れてくるといえる。人々は学習しようとする言語が自分のアイデンティティーに合うときのみ、コミュニケーションを可能とする言葉の流れに乗る精神的抵抗がなくなるのである。

現在、言語能力を高めるように呼びかけてくる声が方々から聞こえてくるが、それはあくまでも理想であり、過剰な期待であるということに注意すべきである。なぜならグローバル化と自由市場経済が先進国を支配するようになり、「競争」という原理が最優先事項になる傾向が大きい。これを受けて言語学習による実利が問われるようになってきているからである。多言語国家のスイスにあって、言語学習といえば、お互いに同じ国民の言語を学習することを思いつきそうなものだが、英語の方ははるかに人気が高い。また、自分の力で言語を学習するより、たまたま二つの言語ができる人に通訳・翻訳させた方が合理的だと考えている人も少なくない。ヨーロッパ共同体は、言語能力を高めるように呼びかけてはいるが、結果的にせいぜい英語の集中講義しか実現しない場合が多い。

英語は *nonnative speaker* の数が *native speaker* の数を上回っている。そのせいか、アイデンティティーの問題がそれほど障害にはならない。また、英語が使えるようになったほうが実用的で仕事などで有利だという共通の考えがあって世界中の人が進んで英語を使用する。しかし、共通語としての英語と、母語話者が自分の社会の内部で自分のアイデンティティーと結びついた英語との違いは著しいものであることも見逃してはならない。

以上のように、スイスの現状を見ると、比較的に小さいグループや地域のなかでしか通用しない、親密さを感じさせる言葉がどんどん重要視されていくという傾向が強まっていることが分かる。同時に、個人のアイデンティティーとあまり関係のない英語の使用が、共通語としてきわめて早く広がっている。こうした相反するような現象は、世界的にも見いだせるのではないかと思う。

終わりに

この発表で言語能力というものを二つの観点から考えてきた。一つは、自分の文化とその言語という狭い世界を越えて、他文化とコミュニケーションできる必要性を強調するという観点である。欧州評議会などが要求する言語能力と、Michael Byram のような言語教育学者が提案している言語能力の高め方が参考になる。とりわけ「知っている」と「できる」ことの違いや、「教師が教える知的な面」と「学習者自身が体系的なアプローチによる認識向上の面」という区別はたいへん刺激になる研究である。

もう一つは、言語能力に関するさまざまな障害を指摘しながら理想化を避け、現実の状況を見つめようとする観点である。多言語国家であるスイスは言語能力の議論の中で理想化されやすい国であるが、スイスが直面している問題を代表的なものとして紹介した。これは今後の言語能力を向上させるために、こういったことを考慮すべきか参考になると思われる。

言語能力とは相手や相手の「世界」の歴史を知らなければ (shared history がなければ) 向上しない。文献分析をおろそかにせず、自分のコミュニケーション・パターンを認識しながら、相手の「世界」を少しずつ、しかも体系的に把握することが重要な点である。これは文化人類学者あるいは民族学者の野外調査のようなアプローチに近いものがあり、イメージとして面白い。また、感情とアイデンティティーの問題が絡んでくると、相手の世界に合わせる事が不可能な場合もあるが、そのとき言語能力は自分と相手のコミュニケーション・パターンをミックスすることによって、双方がお互いに近づくしかない。その近づくプロセスが成功するかどうかは言語だけによらず、態度、経験、スキル、感情の流れなども重要で、共通の課題達成によるところが大きい。しかし実は、こういったことは、欧州での言語能力の議論では軽視されがちであった。

以上のようなことからいえば、今後は言語能力と地域研究者養成を一緒に考えることが一層重要だと思う。なぜなら、言語能力とは特定の地域やグループ内で特定の言語スタイルを身に着ける能力を意味するようになってきており、話し言葉における能力の比重が高まってきているからである。それだけに、すべての理想化を避け、積極的に野外研究に出かけ、知識と感情を合わせ、言語能力を含めての行動能力や認識能力を少しずつ伸ばす態度を持つ者、すなわち *language learner as ethnographer* (民族学者、あるいは文化人類学者としての言語学習者) の在り方は、言語能力を高める際、実に適切なイメージだと思う。

参考文献

- Ackermann, Peter (2005) "Performing to increase turnover. A study of Japanese manuals for shop vendors". In: *Asiatische Studien, Zeitschrift der Schweizerischen Asien-gesellschaft*, 58 (3), 2004: 739-759.
- Ackermann Peter (2006) "Transkulturalität und Pädagogik: Grundsatzüberlegungen zur Entwicklung eines kommunikativen japanisch-deutschen Austauschs." In: Michael Göhlich, Eckart Liebau und Jörg Zirfas: *Transkulturalität und Paedagogik. Paedagogische Grundlagenforschung* (Iuventa Verlag), S. 83-93.
- Altermatt, Urs: "Sprachenblöcke oder Sprachenvielfalt?" Vortrag Universität Freiburg (Schweiz) 15. Nov. 1996.
<http://www.unifr.ch/spc/UF/96decembre/altermatt.html>(Download August 2009)
- 天野正治・村田翼夫 (2001)『多文化共生社会の教育』(玉川大学出版部)
- Autobiography of Intercultural Encounters-An overview of all documents
http://www.coe.int/t/dg4/autobiography/AutobiographyTool_en.asp

(Download August 2009)

Autobiography of Intercultural Encounters-Context, Concepts and Theories

http://www.coe.int/t/dg4/autobiography/Source/AIE_en/AIE_context_concepts_and_theories_en.pdf (Download August 2009)

Byram, Michael (2008): *From Foreign Language Education to Intercultural Citizenship*. Multilingual Matters (Clevedon etc.).

Byram, Michael (1997): *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters (Clevedon etc.).

von Engelhardt, Michael (2006): "Biographie und Narration: Zur Transkulturalität von Leben und Erzählen". In: Michael Göhlich, Hans-Walter Leonhard, Eckart Liebau und Jörg Zirfas (Hrsg.): *Transkulturalität und Pädagogik. Interdisziplinäre Annäherungen an ein kulturwissenschaftliches Konzept und seine pädagogische Relevanz*. Weinheim und München (Juventa), S. 95-120.

Gendlin, Eugene (1992): "The wider role of bodily sense in thought and language." In: Sheets-Johnstone, M. (Ed.) *Giving the body its due*. State University of New York (Albany), pp. 192-207.

Jurt, Joseph: "Kulturelle Vielfalt in der Schweiz-Hindernis oder Vorteil?" Vortrag Schweizerischer Verband der Volkshochschulen, Willisau, 18. Nov. 2006.

http://paperace.ch/j_jurt.pdf (Download August 2009)

Kriesi, Hanspeter, Boris Wernli, Pascal Sciarini, Matteo Gianni (1996). *Le clivage linguistique. Problèmes de compréhension entre les communautés linguistiques en Suisse*. Berne: Office fédéral de la statistique.

Matthes, Joachim (1998): "Interkulturelle Kompetenz". In: *Merkur*, Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken 588/1998, pp. 227-238.

Pétermann, Aline und Franziska Müller: "Le Röstigraben, cela existe? Gibt es den Röstigraben?"

<http://pages.unibas.ch/deja-vu/archiv/roestigraben/existe.html>

(Download August 2009)

Schulz, Renate, und Erwin Tschirner (Eds.) (2008): *Communicating across borders. Developing Intercultural Competence in German as a Foreign Language*. München (Iudicium).

清水睦美・児島明 (2006) 『外国人生徒のためのカリキュラム—学校文化の変革の可能性を探る』(嵯峨野書院)

Sünkel, Wolfgang (1997): "Generation als pädagogischer Begriff". In: Liebau, Eckart (Ed.): *Das Generationenverhältnis*. Juventa (Weinheim, München), pp. 195-204.

成果記録集
往還と横断と——地域文化研究から総合国際学へ

2010年3月31日 発行

発行者 東京外国語大学大学院
組織的な大学院教育改革推進プログラム
「高度な言語運用能力に基づく地域研究者養成」

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

電話 042-330-5273

印刷・製本 三鈴印刷
